



鴻野豊子・高木美嘉著

## 新人日本語教師のためのお助け便利帖

ベテラン講師がスッキリ解決法を教えます！

翔泳社、2015年発行、226p.

ISBN : 978-4-7981-4219-7

宮崎 七湖

### 1. はじめに

本書は経験の浅い日本語教師が日々の授業で遭遇する問題をケースの形式で提示し、その問題を分析する観点、ならびに、解決方法が示されているものである。

授業というものは、なかなか教師が思い描いた通りにいかないものである。教師がどれほど時間をかけて計画を立て、学習者に適した教材を作成し、時にはリハーサルをして、授業に臨んだとしても、学習者の理解や習得が進まなかったり、練習や活動が思い通りに進まなかったりする。学習者から思いがけない反応や不満が起こることもある。

現実の教室で起こるこのような問題は、日本語教員養成課程で、あるいは、教育能力検定のために勉強した教科書を読み直したところで、なかなか解決できないことが多い。経験が長い日本語教師は、それまでの経験から教室で起こりうる問題をある程度予測することができるし、また、問題が発生しても、その場の状況や学習者の様子から瞬時に問題の原因を分析し、臨機応変に解決策を講じる知識や判断力を備えている人が多い。

一方、経験の浅い教師はどうだろうか。ベテラン教師のように臨機応変に対応することは難しい。では、経験の浅い日本語教師がベテラン教師のように教室で起こる問題を未然に防いだり、解決したりできるようになるには、ひたすら経験を積みしかないとだろうか。逆に、経験を積んでいけば、教師として成長でき、教室で起こる種々の問題を解決できるようになるのだろうか。

教師として成長し、問題解決ができるようになるためには、自身の失敗を振り返り、原因を探り、次の実践に活かしていくことが重要である。成長できる教師とできない教師の違いは、どれだけ自己の実践を振り返り、振り返ったことを次の実践に活かせるか、つまり、経験から学ぶ力があるかどうかによると言えるだろう。本書には、具体的な問題のケースごとに教師が自己の実践を振り返る観点と、その観点から導き出される解決策が示されている。

本稿では、まず、本書の構成と内容を説明し、次に、本書の意義と課題を述べる。

## 2. 本書の構成と内容

### 2.1 全体の構成と内容

本書は、3つの章で構成されている。まず、第1章「教室活動、ココで困った！」では、授業準備、導入、練習、応用練習という、教師が具体的に教室活動を進める過程に沿って、それぞれの過程で生じる問題のケースが16ケース取り上げられている。

それぞれの段階でどのようなケースが取り上げられているか、例を挙げる。まず、授業準備の段階で発生する問題としては、「授業の時間配分がうまくいかない」、「プライベートレッスンの教材の選択に悩む」といったケースが扱われている。次に、導入の段階での問題としては、「教師用指導書通りに導入をしたのに学習者が理解できなかった」というケース、練習の段階では、「形式の練習のときに学習者が声を出さない」というケースや「授業が単調になってしまう」といったケースが取り上げられている。応用練習の段階では、「準備した活動がまったく盛り上がらなかった」というケースや「学習者が中級になっても復文を使おうとしない」といったケースが扱われている。

第2章「科目別、ココで困った！」では、文型、作文、聴解、読解、会話、発音、漢字、語彙、日本事情といった、日本語の授業で扱う技能や項目別に、それぞれの授業で発生する問題が42ケース掲載されている。

ここでもいくつか例を挙げよう。例えば、文型に関する問題では、「て形を導入し、練習をしているのだが、なかなか定着しない」といったケースが、作文の授業に関しては、「誤字や文法の誤りを添削して返却しても、同じ誤りが繰り返される」というケース、会話の授業に関しては、「学習者にロールプレイをさせているが、どのように評価やフィードバックをしたらいかががわからない」といったケースが取り上げられている。また、読解の授業の問題としては、「初中級のレベルで新出語彙や文法を追うだけの授業になってしまっている」というケースが扱われている。

第3章「クラス運営、ココで困った！」では、クラス運営にかかわる問題が、教師側に起因する問題と学習者側に起因する問題、さらに、年少者、ビジネスパーソンといった対象者別に発生する問題に分けられ、全18ケースが扱われている。

例えば、教師側に起因する問題として、「授業中に学習者の質問に答えられず、対応に困る」といったケース、学習者側に起因する問題としては、「学習者の意欲の低下」や「クラス内の発話の偏りに悩まされる」といったケースが扱われている。対象者別に起こる問題としては、「海外の大学で大人数のクラスを任されたが、どうやって会話練習をしたらいいかかわからない」といったケースや「年少者に対する教え方がわからない」、「ビジネスパーソンに適した教え方や練習方法に悩んでいる」といったケースが扱われている。

巻末には付録として、聴解力評価表や課外活動の教材例、ウォームアップから文型の導入、練習、応用練習、まとめまでの流れが詳細に示された教案の例が掲載されている。また、語句索引とテーマ別索引が付されており、読みたいケースがすぐに探せるようになっている。

## 2.2 各ケースの構成と内容

本節では各章で取り上げられているケースとその解決法がどのように提示されているか説明する。まず、問題発生のケースが新人教師の悩みとして具体的に書かれている。例えば、第3章では、クラス運営に関する問題として学習者の母語使用の問題が取り上げられている。ケースは次のように記述されている。

クラスでは基本的に英語や母語の使用を禁止しています。しかし、ディスカッションのとき等、話が盛り上がってくるとすぐに英語になってしまいます。一度英語になってしまうと、止めることができず、そのまま話させてしまうこともあります。このような学習者にはどのように対応したらいいでしょうか (p.190)。

このような具体的な悩みや問題の状況を読んだ後に、「1. ココに注目」でいくつかの質問がなされる。これらの質問は、読者が自分の授業を振り返り、問題の原因を探るための質問である。例えば、この学習者の母語使用のケースでは、「学習者はどんなときに英語(母語)を使っていますか。」「そのとき、どうして学習者は英語(母語)を使ったのだと思いますか。」という2つの問いが投げかけられている。

次に、「2. 解決法」では、「1. ココに注目」で考えた観点に基づいて、どのように問題を解決することができるのかを述べている。例えば、「学習者はどのようなときに英語(母語)を使っていますか。」という問いかけがなされたが、学習者が英語(母語)を使用する3つの場面、「教師が説明しているとき」、「みんなの前で発表するとき」、「ペアやグループでディスカッションするとき」に分け、それぞれの場面で学習者がどうして英語(母語)を使用するのか、その原因を分析し、原因ごとの対処法を示している。その上で、伝えたい内容を重視する場合は、英語や母語を使用してもよいという考え方もあることにも触れている。

ケースによって異なるが、他のケースにおいても具体的な解決法が複数示されている。例えば、「具体例」、「工夫例」、「対応例」、「教室活動例」、「添削例」といった具体的な例や、評価ポイント、評価シートや語彙マップの例といった、すぐに活用できそうな資料が掲載されている。

最後に、「3. ここがポイント」には、「2. 解決法」に書かれた内容が要約されていて、この部分は、最初の新人教師の悩みに対する回答となっている。例えば、先の学習者の母語使用の問題の例では、次のようにまとめられている。

「英語禁止!」と言う前に、学習者をしっかり観察してから対処法を考えましょう。英語で盛り上がり始めたら、「では、それを日本語でお願いします」とクラス全体で日本語にしてもらう方法もあります (p.191)。

以上、本書の全体構成と内容、各ケースの構成と内容をまとめた。

### 3. 本書の意義と課題

本書の顕著な特徴は、日本語教育の現場において実際に起こりそうな身近な問題が、ケースの形式で示されていることであろう。日本語教育に携わったことのある読者であれば、必ず「自身も同じような問題を経験したことがある」というケースが少なからず掲載されているのではないだろうか。

新人日本語教師のケースとして提示されているという点は、本書の重要な点であろう。本書の読者はケースを読むことで、自身が経験した同様のケースを、思い起こすことから始めるだろう。あるいは、自分が現在直面し、悩んでいるケースを本書のケースの中から探し出し、問題の解決方法を求めて、読み進めることもできる。第2章の2節で述べたように、各ケースの後の「1. ココに注目」では、教室活動の目的を考え、教師自身の行動や学習者の反応や様子を振り返り、問題発生の原因を考えるための質問が用意されている。新人教師が共感を持って読むことができるケースは、問題を自身の実践と結び付けて考える仕掛けとして機能するだろう。1章で述べた通り、成長していける教師は、経験から学ぶ力がある教師である。経験から学ぶためには、自己の実践を適切に振り返り、次の実践につなげていくことが必須であり、本書の意義はここにあると考える。

次の特徴として挙げられるのが、実際的であることである。これは、ケースの形式で提示されていることとも関連するが、本書が扱っているケースは、特定の文型の導入や練習、定着の問題に関することから、授業準備、クラス運営、学習者への対応に至るまで、多岐に渡っている。書評執筆者自身も経験した問題が多く、経験したことがなくても、教員室等で見聞きした話が大半である。著者である鴻野氏、高木氏のさまざまな教育機関における長年の教育経験があつてこそ、このように幅広く、現実味のある問題を集めることが可能であったのだろう。

さらに、本書の実際的な面を際立たせているのが、「2. 解決法」で示されている豊富で具体的な説明例、対応例、教室活動例、評価シート例などである。また、前述したように具体的な解決策の前には、「1. ココに注目」があり、読者が自身の実践を振り返れるようになっているため、それを踏まえた上で、提示された解決策が自身の実践にも適切なものであるのか、適切でなかったとしたら、どうしたらいいのかが考えられるようになっている。この点も本書の重要な点であろう。

最後に、本書の課題を述べたい。共感できるケースではあるが、問題を分析する観点が他にもあるのではないかと感じるものがいくつかある。例えば、「感謝の気持ちを表す『～てくれる』の文型を導入したが、学習者が書いた作文にこの文型が現れない」(p.54)というケースがある。類似のケースに、「被害の気持ちを表す受身形の導入と練習をしたにもかかわらず、学習者の発話に受身文が出てこない」(p.62)というケースも取り上げられている。書評執筆者も共感を持ってこのケースを読んだが、「1. ココに注目」、「2. 解決法」では、気持ちに注目した導入がなされていないのではないかと原因を分析し、この文型の使用場面や気持ちにポイントをおいた導入例を示している。

確かに、導入方法の不備が、この問題の原因となっていることもあるだろう。しかし、解決法で示されている説明や方法は、多くの教師用マニュアルにも示されているもので、

多くの教員が同じような導入を試みているのではないか。書評執筆者は、この問題は本当に導入の不備に起因する、学習者の理解の問題なのかと考えた。このような文型が運用できるようにするには、これらの文型が実際に使用されている場面で繰り返し聞くより方法はないようにも思う。本書には「て形が定着しない」(p.58)というケースも掲載されており、解決法として練習方法の再検討が挙げられている。このケースについても同様のことを考えたが、「教師が教えたことを学習者が理解したとしても、すぐにできるようになるわけではない」という視点を教師がもつことも重要なのではないか。

もう1つ問題を考える観点や示された解決法とその説明が不十分なのではないかと考えたケースがある。「読解の授業の進め方やフィードバック方法に悩むケース」(p.132)である。このケースの「2. 解決法」には、読解の授業で各自が文章を読んだあとで、クラス全体で確認する方法として、「クラス全体で音読する」、「クラス全体で確認する」という2つの方法が示されている。さらに、音読の方法として「1人1文ずつ読む」、「段落ごとに読む」、「配役を決めて読む」という3つの方法が提示されている。日本語の授業における音読の意味や効果は、書評執筆者も考え続けているテーマである。音読の活動に意味を見いだせず、拒否をする学習者もいる。もし、音読を読解の授業の方法として提示するのであれば、「何のための音読なのか」を考えるための問いや説明が必要ではないか。

先に、本書の利点として解決法が自身の学習者や教室に合っているものであるかを検討した上で、選択できることを述べたが、どのような解決法を選ぶのかは、教師の教育観、学習観にも大きく関係している。それを大前提として本書を活用できればよいが、新人教師は、例えば、「なぜ音読をするのか」という観点を持ちにくいだろう。その結果、活動の目的や意義を考えることなく、この解決法を採用するという考えられる。このように、より根本的なところから問題を考える視点を提示する必要があると思われるケースがいくつか見られる。

#### 4. おわりに

本書には、これまでさまざまな日本語教育機関で実践をしてきた著者が長年の経験で培ってきた経験知が凝縮されている。題名が示すように、主な読者を新人教師と想定しているが、新人教師にとっても、ベテラン教師にとっても、自身の実践を振り返るのに役立つものであろう。また、「こんな方法もあったか」、「今度試してみよう」というアイデアも数多く紹介されており、明日の授業ですぐに使えるアイデアを見つけるのにも役立つそうである。

(みやざき ななこ 新潟県立大学国際地域学部)